

アセビ

つねきよ
常清にて

(撮影：桐原真希)

常清の集落奥で出会った花、アセビ。ひとときわ鮮やかな桃色でその存在感をアピールしていました。正式にはピンク色のアセビは品種の一つで「アケボノアセビ」と呼ばれています。日本最古の造園植物の一つともされているアセビは、万葉集にも十首ほど詠われています。今からの季節、緑水湖周辺の林道でも、白花の野生のアセビを多く見かけます。可愛らしい花の姿からは想像がつかませんが、実はアセビは強い毒を持つ植物です。漢字では「馬酔木」。まさに、馬が食べて酔っぱらったかのようになる、その特性を表わしています。かつて、アセビの有毒成分は「アセボトキシシン」という名前でしたが、最新情報ではこの名前が変わり「グラヤノトキシシン」という名になりました。

学生時代、サークルの先輩たちと神奈川県丹沢の山を歩きました。その尾根道は、アセビばかりが目立ち、まるで人が植えたかのように延々とアセビ道が続いていたのです。その時、先輩がこんなことを話してくれました。「かつては、ニホンオオカミがこの丹沢にも生息し、ホンシユ

ウウジカを捕食してその個体数が増えすぎないようにバランスが保たれていた。そして、オオカミが絶滅してからシカやイノシシが増え、山の植物の若芽を多く食べるようになった。冬は木の皮も食べ木を枯らしてしまう。一方、有毒物質を含むアセビは食べられずに残され、アセビが優先して見られるようになった。これは、山の植物の多様性を失うことにもなる。」そんな話だったと記憶しています。

つまり、人がオオカミを絶滅させてしまったことにより、山の生き物たちのバランスが崩れ、本来ならば多種多様な草木が育つ場所に特定の種類しか生き残れない環境になっているのです。さらには、草木が育ちにくい場所は森の保水力も弱まり、土砂災害も起きやすくなるといわれています。まさに「風が吹けば桶屋が儲かる」ということわざのイメージが重なります。

初夏まで楽しめるアセビの花をみるたびに、この生き物たちの微妙なバランスとつながりを思い起こします。

自然観察指導員 桐原真希